言語研究（*Gengo Kenkyu*）**142**: 143–154（2012）

**【フォーラム】**

# 奄美語の現況から

松本　泰丈　　田畑　千秋
別府大学　　大分大学

**【要旨】**2009 年にユネスコによって「危機言語」として指定された奄美語の現況を，本土出身の研究者（松本）と島出身の native speaker（田畑）という異なった立場を持つ二名が，それぞれの立場から粗描した。粗描の方法は「1960 年代までの奄美語」,「1970 ～ 80 年代の奄美語」,「1990 ～現代の奄美語」に分け，それぞれの時代における奄美語の状況を，両名の直接見聞をふまえて述べる。（結論的にいえば）両名は，1960 年代まではシマユムタ（伝統的方言）が生きて使われていた時代，1970 ～ 80 年代はトンフツゴ（奄美共通語）が急速に広まった時代，1990 年～現代はシマユムタが急速に消滅している時代ととらえている。

また，論文末には，明治以降に奄美大島旧笠利村赤木名集落の人々によって再開拓されたトカラ列島諏訪之瀬島の言語事情についても現況を簡単に報告した *。

**キーワード：**シマユムタ（伝統的奄美語），トンフツゴ（唐芋普通語），共通語教育，諏訪之瀬島

## 1. はじめに

2009 年ユネスコによって，八丈語，宮古語などとともに「危機言語」のひとつとされた奄美諸島の方言について，その危機ぶりを中心とした現況を，筆者たちのしるこれまでのなりゆきをふまえて紹介したい。筆者二名のうち，松本泰丈（以下松本）は本土出身，田畑千秋（以下田畑）は地元出身である。

なお，今回のユネスコの発表の意義をみとめたうえで，ほかのしまじまも同様だが，「奄美語」というよびかた，そのよびかたにあらわれたとらえかたには方言区画のことや方言と言語の区別にからんで，筆者二名とも，かならずしも納得しているわけではない。ここでは便宜的に，奄美諸方言の総称として「奄美語」をもちいる [1]。

---

* 執筆者二名が奄美調査に本格的にたずさわって四十余年が過ぎてしまった。その間，多くの奄美の人達から有形無形の支援をいただき，勉強させていただいた。その方々のなかには，すでに幽冥界へ旅立たれた方も多い。今となっては，直接会ってお礼を述べるすべもなくなった。誠にさびしく，日月の経過の早さを実感している。本稿をまとめるにあたり，二人の脳裏には，いつもやさしく，きびしく導いてくださった奄美の方々の顔が一人一人浮かんでいた。ここに記して，感謝の意を表したい。

[1] 本稿では奄美諸方言の総称として「奄美語」を用いているが，伝統的方言の意味で「シマユムタ」も使う。ちなみにシマユムタは，場面によっては奄美語のことであったり，また狭く各自の集落の言葉であったりする。島や集落によっては，シマクゥトバ，シマフトゥバ，シマグチ等々ともいう。

以下の記述は，全体として，筆者二名の個人的な経験にとどまり，方言の現況という段階まで一般化しきれていないものからなるが，両名としては，むしろ意図してそのようにしたところがある。方言の消滅段階にあってあらわれる諸現象のうち，さいわい執筆者の耳目にふれることのできたものを，材料としてさしだすことにつとめ，それからさきの論だては，ひとまず別のこととしたい。

## 2. 1960 年代までの奄美語

田畑は奄美諸島が日本に復帰する前年 1952 年に奄美大島の中心地旧名瀬市に生まれた。

家庭内における父母間の会話（日常会話）は，父母が死去するまですべて伝統的奄美語でなされていた。出生当時は祖父母も存命で同居していたので，はじめて耳にしたヒトのコトバは，伝統的奄美語であったことは確かである。ただ父母は夫婦間での会話は伝統的奄美語を使っていたが，私ども子供（五名兄弟姉妹）に向かうときには，瞬時に共通語に切替えて話した。しかしこのわざを祖父母は使えなかった。祖父母は孫と話すときにも伝統的奄美語しか使わなかった。というより，祖父母は日本共通語を使いこなせなかったのである。

祖父母の代の言葉に関するエピソードには事欠かない。

たとえば，ヤマト（鹿児島以北の日本）に行って，「ブタノ　ココロ　ウッテクダサイ（豚の心売って下さい）」と言った話。これは奄美では心のことをキム（肝）というので，それを直訳したのである。

また，卵のことをなんというかわからず，「コォッココココ，コッコォー」と鶏の鳴き真似をし，股間から卵を落とすしぐさをして，やっと卵を手に入れた話。これは「トゥンニュ　コォガ（鶏の子）」で通じなかったからである。

あるいは，警官が，集落巡視をしているときに，女達が火を焚いてぬくんでいるところに遭遇したので，火の用心をうながすために，「火，消せ」と言ったが，それを聞いた女達は，「アブジブジ，ヒ　カラスィチドゥ　ィユーバ（あれまあ，女性器を貸せと言っているよ）」と言って逃げていったという話。これは奄美大島では「ヒ」といえば女性器のことで，「火」は「マァーツィ」「ウマツィ」「マァッチ」（いずれも「御松」から出た語）だから通じなかったという艶笑小咄である。鹿児島なまりでは，「消せ」ということばも，前後関係から「カラスィ（貸せ）」に聞こえたのであろう。

父母の代は学校教育が浸透した時代である。大正末期から昭和初期の尋常高等小学校では，家庭内での言葉と学校での言葉が対立したが，生活の基盤（生業・家族組織・集落組織・行事等々）が伝統的奄美語で支えられていたので，日常語としての共通語は普及しなかった。ただ共通語教育にはそれなりの力点がおかれた。親に聞かれたくない話や親への文句などは，わざと共通語でしたというエピソードも聞かれる。「掃除の罰当番」，「方言札」（方言を使った罰として，首から〈方言を使いました〉などと書かれた札を「はかされる」罰），「週番による集落内巡見」，「バケ

ツを持って教室のうしろに立たされる罰」,「校庭を走らされる罰」等々の証言が豊富に得られるのはこの世代である。

これより少し時代が下がって, 昭和十年代後半には小学校は国民学校と改称され, 全国的に共通語教育が徹底された。奄美大島からも二人の教員が東京に派遣され, 帰島した後, 厳しい共通語教育が実施された。高学年生が言葉の委員として, 方言を使った人を調べてノートにつけ, それを先生に報告するということなどがおこなわれていたこともある。標準語の発音, アクセントも厳しく指導された。鼻濁音はもちろんだが, アサヒという語のアというところに線を引き, そこを強く発音するのだなどということも具体的に教わっている。そのため,「二時間目の休み時間は少し長かったので, グループを作ってアクセントの練習をした」という学校もあった。その学校では, 外地から引き上げてきた子が, とても共通語を上手に使うということで, 模範生として級友の指導にあたっていたという。その会話練習の一例。

(1)　「S さんはどこで生まれたの？」
　　「私はハルピンの病院で生まれたの」

戦後 1950 年代～ 1960 年代は団塊の世代をはじめとする戦後世代が学齢期を迎えていた。これは田畑の実体験である。

田畑は名瀬市立名瀬小学校に 1959 年に入学, 1965 年に卒業をしているが, 低学年時の朝礼では全校生徒が整列して, 次のような歌をうたわされていた。

(2)　ボクガネ　ボクガネ
　　ボクガ　キミヲ　キミッテ　ヨンダ
　　キミモ　ボクヲ　キミッテ　ヨンダ

歌詞も単純だが, 曲も単純ですぐに覚え, 家でもくちずさんだ。この歌は, 友人同士のよびかけに「ボク（僕)」「キミ（君)」というヤマトグチを使うようにとの指導である。というより, 方言の「ワン」「ィヤ」を使わないようにという教育であった。6 年生が 1947 年生まれ, 5 年生が 1948 年生まれ, 4 年生が 1949 年生まれという, まさに戦後ベビーブームの現出した小学校で, 全校生徒は 3000 人を越えたが, 狭い校庭にオルガンを出してきて, それに合わせて全校生徒が歌ったのである。

ただ, 記憶では 3 年生になると, 朝礼時にこのような指導はなくなった。上記のことは田畑千秋（2000）にも書いたが, その執筆時, かつての恩師達に聞いて回ったところ, その時に在籍していた幹部教員の一人が, 国民学校教員時代に東京へ標準語教育のために派遣されていた教員だったので, その教員のいた期間のみの朝礼風景であったとのことである。

田畑は小学校, 中学校, 高等学校をとおしてほとんど「ボク」「キミ」という言葉は使った覚えがない。いつも「ワン」「ィヤ」であった。ただ, 奄美の中心地名瀬は, 周辺町村からの入り込みが多く, その頃, すでに伝統的な「ナゼユムタ（名瀬の言葉)」は, 徐々に脇のほうに押しやられていく傾向にあったと思われる。大

人達は遠慮なしにそれぞれのシマ（集落）の言葉を使い（たとえ遠慮してもナゼユムタは使いこなせなかったのであろうが），子供たちはいわゆる「トンフツゴ（唐芋普通語。島の普通語を自嘲的に薩摩芋普通語と呼んでいた）」を使っていた。

トンフツゴは世代間，男女間，地域間で差違があるが，お互いに通じるので大変便利であった。このトンフツゴは，伝統的方言を知らない人（ヤマトッチュ）が聞くと充分に方言だが，奄美の人はそれを名称通り，普通語（共通語）だと思っている。

(3)　ツクエ　ソビイテ　イコ（机を　引張って　行こう）。
(4)　ハゲ，アナガ　ホゲトル（あれ，穴が　開いている）。
(5)　タローワ　ツリシガ　イッタガ（太郎は　釣りをしに　行ったよ）。
(6)　シガツカラ　コーコー　アルイテイマス（四月から　高校を　歩いています。四月から　高校に　通っています）。

トンフツゴの特徴はいろいろあるが，述語に関する例として，九州方言の～シヨル形とともに，～シトル形もはばをきかせるようになっていることをあげておこう。

(7)　シマユムタ：タローヤ　コイムン　イキュタッカ（太郎は　買い物に　行きおった[2]）。
　　トンフツゴ：タローワ　カイモノ　イキヨッタヨ（太郎は　買い物に　行きおったよ[2]）

(8)　シマユムタ：サブローヤ　エ　カキュタッカ（三郎は　絵を　描いていたよ[3]）。
　　トンフツゴ：サブローワ　エ　カキヨッタガ（三郎は　絵を　描いていたよ[3]）。
　　シマユムタ：サブローヤ　エ　カシュタッカ（三郎は　絵を　描いていたよ[3]）。
　　トンフツゴ：サブローワ　エ　カイトッタガ（三郎は　絵を　描いていたよ[3]）。

この時期，名瀬の子供たちの言葉は急速に伝統的方言を失いトンフツゴ一色に染まっていったようである。だが，名瀬以外のシマジマの子供社会では，まだ生業をはじめ村社会，家族形態などのおかげで，シマユムタは生きて使われていたようである。それは，高校に入学して各島々のシマジマ（集落集落）から集まってきた同級生のことばを聞いていてもよくわかった。名瀬出身の高校生の話し言葉は共通語に近い（トンフツゴ）が，名瀬以外の集落出身の高校生はシマユムタに近いことばをあやつることができるのである。これが 40 数年後の現代（2012 年），名瀬出身の 60 歳と他の集落出身の 60 歳のことばの違いとなっているのは当然である。

高校一年次に川端康成の『雪国』を教わった折，指名読みで立ち上がって朗読する級友の出身集落がわかったのは，主に抑揚の差からである。

---

[2] 買い物に行くために歩いていた太郎を見かけた話者が，「太郎が実際に歩いているのをこの目で見た」ということを含めて第三者に話す場面。
[3] 絵を描いていた三郎を見かけた話者が，「三郎が実際に絵を描いているのをこの目で見た」ということを含めて第三者に話す場面。

また, 旧名瀬市（三方村）の芦花部集落や有良集落のことばを, 名瀬の人々は「アキューエーゴ（芦花部英語）」「アッタエーゴ（有良英語）」と揶揄していたのを記憶している人はまだ多い。また，旧名瀬市（三方村）の浦上集落と大熊集落は，今では車で 5 分くらいの近さだが，田畑はシマユムタを使うとき，一言二言話しただけで，浦上の人か，大熊の人かがわかる。このことは集落ごとの方言差がいかに大きいかを物語るものであろう。父は，同じナゼユムタであっても，イフユムタ（伊津部のことば）とカネクユムタ（金久のことば）とでは違うと，真似をして聞かせていた。

### 3. 1970 ～ 80 年代の奄美語

田畑は，1971 年から奄美各地をまわり，神歌，島歌，八月歌，神話，伝説，昔話，唱え言，ことわざ等々の口頭伝承を意識的に集めてきた。それはすべて父の仕事の継続である。この（島，シマ巡りの）採訪でまずおどろかされたのは，島ごとのことばの違いである。1971 年，岩倉（1943）のその後を調査するため，一人で喜界島に渡り，おもに当時 70 歳，80 歳代の話者から昔話を中心に話を集めた。私のナゼユムタはだいたい 100 パーセント，喜界島の古老に理解されたが，喜界島の古老の話は，その場で 100 パーセント理解というわけにはいかなかった。随所で聞き直し，あるいは説明を加えてもらうことが多かった。18 歳の青年の言語能力と 70 歳，80 歳代の方々の言語能力の違いもあったと思われるが，奄美の共通語にはついぞなりえなかったナゼユムタでも, やはり奄美では中心的なことばで, 他の地域の人々は話すことは難しくても聞くことはできるのだということがわかった。その折，ある媼に私の出自はどこだと思うかと尋ねたところ，大島北部のことばなので，きっと名瀬の人であろうと，ずばりいいあててくれた。採集した資料は，神話，昔話，伝説等々であるが，ほとんど父がテープをおこして文字化，標準語訳をした。その一部は田畑英勝（1974）におさめてある。父が喜界島のことばをほとんどテープおこしでき，標準語訳できたのは，シマユムタの応用力と年月をかけた訓練（学習）の成果である。

1973 年，与論島に採訪した。その折は，喜界島のことばどころではなかった。今度は私の名瀬方言が通じないことがあり, 共通語での聞き出しになってしまった。それでも父が私に与えた課題は，伝統的与論方言での神話，伝説，昔話調査であった。実はその折は，良いことに私の祖母（母方の祖父の後妻）が与論島の人で，通訳を兼ねて，ずっと一緒にまわってくれていた。おかげで多くの伝説，昔話を採集できたが，テープおこしの際に感じたのは，語りの現場ではわかったつもりであった与論のことばも，一語づつテープをおこすことは，私個人では不可能だということであった。そのため与論島採訪のテープおこし，訳出もすべて父の仕事になってしまった。

この旅では，与論島の人々は同じ奄美諸島に属しながらも，大島よりも，沖縄のほうに親密な視線を送っているということ，そして言葉も文化もずっと沖縄に近い

ということを実感させられた。2009 年にユネスコが，大島，徳之島，喜界島（国頭語に近いところもある）は奄美語，沖永良部島，与論島は北部沖縄とともに国頭語と発表したのは妥当であろう。

昨 2011 年 9 月に徳之島で島嶼学会があり，地元徳之島天城町の方が徳之島方言を随所にまじえて基調講演をした。その折，その講演を一緒に聞いていた友人（50 歳代・男性）が，「田畑さんは聞いていてわかりますか？」と尋ねたので，「わかりますよ」と返答すると，「自分にはほとんどわからない」といった。その彼は伝統的沖永良部島知名方言の使い手である。徳之島と沖永良部島間の言語境界がいかに深いものであるかがわかる会話であろう。

1970 年代は，シマユムタ，島歌の消滅の気配を肌で感じるようになったか，地元楽器店主催で島歌大会が催されるようになった。現在，島歌が盛んなのは，この危機を乗り越えたからである。ただ，消滅の危機を乗り越えても，かつての歌遊び（座敷で歌を掛け合わせる遊び）は様変わりし，以降島歌は舞台上の上手（ウタシャ）の歌に耳を傾けて聞くことが主流になった。また，市販のレコードがカセットレコーダーに変わっていったのもこの頃である。

島歌大会と同じ頃から，地元新聞社主催によるシマグチ（シマユムタ）大会が催されるようになり，各地のシマユムタが舞台上で披露され，喝采を浴びるようになった。その影響は教育の場にも波及し，各地の小中学校においても，児童，生徒が祖父母などの指導を受け，舞台上から，少々ぎこちないシマユムタを発表している。島歌大会，シマグチ大会などは，絶滅の危機に瀕している奄美の言葉や歌を部分的にではあるが残存させ，保存していく上におおいに役立っていると思われる。

奄美諸島の 1970 年代は 1972 年の沖縄復帰によっておおきな影響をうけるが，それによって奄美の言語，言語生活がただちにかわったわけではない。松本は 70 年代から奄美にはいっているが，そのころはシマにいくと，老人たちを中心として，なお方言をいきたはなしことばとしてきく機会はすくなくなかった。しかし，そういう老人たちでも，直接方言のことをきこうとすると，わしらは方言はつかわんよーとか，この部落は（当時はいまよりふつうにシマのことをこういいかえていた）普通語をつかうことでほめられたことがあるとかいわれたりして，なかなかおしえてもらえるところまではいかなかった。シマのことばについてききだそうとする本土の人間が，標準語の普及度をしらべてまわっているとみられる時代（学校では方言ふだがつづいていたころにあたるだろう）のよくない印象がのこっているような感じをうけた。一方，当方がヤマトンチュとわかっていても，終始方言でかたりかける老人がいた（龍郷町嘉渡）。また，小学生くらいのこどもでも，はなしかけるとハイ，イイエのこたえなどは，方言で，しかも上位者への応答語がしっかりかえってきた（与論町茶花）。また，高校で方言のことをはなしたおり，シマでのものの名をたしかめたところ，生徒のなかから即時にこたえをきくことができた（与論町）。

シマのはなしを夫妻からきかせてもらっていたら，突然ご亭主がどなりだして，

なんとかはなしのすじをおっていた当方にはなにがなんだかわからなくなった。あとできいたところ，興にのりすぎた刀自のほうが本人のさとことばでかたったので，つれあいがしかったのだという。よめいりしたらさとのことばをつかわないようにしていたこと，シマごとのことばのちがいが，たがいに理解されていたことがわかる（喜界町）。なお，喜界島ではシマごとのちがいについて，2010 年にでかけたおりにも，それはヨソのことばとか，○○のいいかたとか，おおきなちがいのばあいかもしれないが，シマびとははっきりととらえているようだった。

もののよびかたがこあざでちがっていることも体験した（喜界町）。以前にも紹介したが，スカ（ちょか，チュカから）のそそぎぐちのところを（スカン）ビーというかティーというかを，こあざのちがううまれのふたりのおとしよりが，たがいにはじめて確認することになったらしいのである。奄美諸島の方言ではピーとかヒーとかいう音をもつ単語が，その意味のせいで連想がよくないようだ。激論をたたかわせていたひとりが，スカンビーなんて，といやがったことも，そのつながりを説明してくれた。これがこあざの共通感覚だったとすれば，よくない連想のビー（樋）をやめて，ティー（トヒから）に，一方のこあざでかえたのだとかんがえられる。

小学校・中学校での，かつての方言ふだをつかったようなおしつけ標準語教育は，さすがにみられなくなったようだが，ひとつの文化として方言を尊重することをおしえるというのも，なお実践のなかにいかされてきているとはいえなかった。しかし，一部の国語の先生が，授業で方言をつかったりすることはあったようである。こういう先生は，生徒たちに家庭での，両親，祖父母たちとの言語生活にかようものを学校でも感じさせることになっていたのだろう，多少こわくても，もちろん方言をつかうその一点からだけではないのだろうが，生徒に人気があった。

この時期に方言のことをおそわっていたおりの体験ものべておきたい。あるシマの方言について，おなじひとからずっとおそわっていると，あいてもだんだんとしをとってくる。71 年にはじめておそわってから，最後は 80 年代になっていた。ひさしぶりにたずねたところ，刀自のことばでは，とうちゃんはドーモー（老耆）してもうなにをきいてもはかばかしい返答はもどってこんよー，ということである。それでも案内してもらえたので，これまでどおり対座した。メノマエにいるのがなん度もおそわったことのある人間であることなど，まったくわからない様子である。方言のことできたというのはつたわったので，以前おそわった情報のなかから，こちらにとってむずかしかった事項を，再度きいてみた。すると，前回とおなじこたえがもどってきたのである。当方が，これはいえそうだとおもってきいたところも，「いや，いいません。」とまえのとおりだった。それでひと安心して，つづけてきくことにした。その日辞去するまで当方がなん回もおそわりにきたことは，まったくわからなかったようだが，はるかにふるい，うまれジマのことばのことは，記憶に鮮明だったのだといえる。たとえドーモーしていても，ことばをつかうことができて，からだも元気だったら，朝食の献だてのことはききだせなくても，本人の第一言語のことは，なおおしえてもらえる可能性があるのではないか（かけろま島諸鈍）。

与論島で個人的なあきないに従事している沖永良部島（知名町）出身の青年に，70 年代にきいたところでは，はじめは与論のことばがわからなかったそうである。半としぐらいたつとわかるようになったというのが，はやいのかおそいのかは別として，70 年代の与論島では，方言での言語生活が，まだかなりゆきわたっていたことがみてとれる。また，沖永良部島出身の青年も，与論島のことばを，本人の方言とあれこれつきあわせていたようである。ソトからみては，沖永良部島，与論島の方言は，おおざっぱにひとくくりしてしまうが，ウチからだと，こまかなちがいが，とても気になったはずである。

もっとも，70 年代のはじめにこんなことがあったのを，以前紹介したことがある。旧名瀬市でおこなわれたシマウタ大会で，与路島出身のわかい女性が（高校生だったかもしれない）「いきゅんにゃかな節」をうたったとき，会場できいていた老人たちのはなしがみみにはいったのだが，それは，「はぐぇー，あんウタシャーはわかいのに感心じゃやー，イキグルシャのところをちゃんとうたとぅたがねー。」というようなことだった。イキグルシャは動詞イキュン（イク）の系列（イキニクイ，イキガタイ）だとキを有気音で発音しなければならない。無気音で発音すると「息グルシイ」になってしまう。しかし，方言のキの発音では無気音のキのほうがふつうで有気のキは特殊なのである。そこで行キニクイ，ハナレガタイが息グルシイになってしまうことになる。老人たちがわざわざ感心したのは，わかいものの発音に，すでにこの混同，みだれがでているのを，にがにがしくおもっていたせいだろう。この種の方言の質の低下ともいえるさまがわりが，すでに 70 年代はじめの奄美にひろくみられたかはおいても，わかい世代の名瀬ユムタの変質の，個別的なあらわれのひとつだったのだろう。

1976 年に，それまで NHK テレビだけだったところに，民間放送のテレビがくわわった奄美大島旧名瀬市のようすも，印象にのこる。名瀬のまちなかには，それまでシマザケ（黒糖焼酎）しかださないようなちいさな一ぱいのみやがかなりあったように記憶するが，民放テレビがはいってから，そういうみせがつぎつぎとすがたをけしていった。名瀬市内にすんで，あるいは近郷近在からやってきて，市内でしごとに従事するしまびとが，民放テレビ以前なら，そのようなのみやで時間をつぶしてから帰宅したのだろうが，よりみちをすることなくまっすぐ帰宅するようになったのではないか。零細のみやがやっていけなくなるわけである。言語媒体としてのテレビのおおきさからみて，これがその後の言語生活に影響しないではいなかっただろう。

沖永良部島方言に関しては，岩倉（1955 [1943]）に説話だが標準語訳をしないで，原話どおりに文字化された（伊波普猷式のローマ字表記）ものがある。そこにあらわれた語彙現象，文法現象に関して，沖永良部島へいって和泊町の役場にたちよったさい，1 階にいる職員たちに，それらのいいまわしについてたずねてみた。しかし，こたえてくれた職員は，そういういいかたはしらないといい，なかには岩倉のうまれじまである喜界島でつかうかたちではないかという発言もきこえてきた。そのう

ちひとりが，いま町史の編纂のことでわれわれより年輩のひとが二階にあつまっているから，そこへいってきいてみたらどうかといってくれた。そこでやっと，ああ，むかしはそういいよった，というこたえをえることができた。

このこたえがえられなかったら，せっかくの岩倉によるかたりどおりの記録も，かきてのマチガイとして処理されてしまうだろう。いままでに発表された方言事実の記録は，表記からはじまって正確とはいえない面をふくんでいて，それらを点検して，よりよいものにしていく必要があるが，そのなかには，そもそもそのかたちが，方言として存在していたことの確認もふくまれる。これははやくしないと，記録者のマチガイという処理が，はばをきかせることになるだろう。

80 年代になってからだが，沖永良部島出身の学生が，卒業論文で沖永良部島方言をしらべたおり，50 年代の九学会奄美調査のときにはハ行音が両唇音でなくなっていたのが，両唇音ででてきたことがあった。これは両唇音が復活したわけではなくて，1950 年代の九学会時代の中央から来た大先生でなく，郷土出身のわかい学生による調査だったので，しまびとも安心して，ふだんつかっているとおりの発音でおしえてくれたのだろう。九学会調査当時の徳川宗賢がまだわかかったとしても，被調査者にあたえる緊張は，かなりのものだったことがおもわれる。

## 4. 1990 年代〜現代の奄美語

2002 年夏，田畑はトカラ列島に遊んだ。戦前にトカラ列島にいたという人や，親戚がトカラ列島に移住しているという人を多く知っていたので，行きたいと思いながら，なかなか行けなかった島々である。

琉球方言と本土方言をへだてる大きな溝は，奄美大島北部笠利沖にある。その溝は本土文化と琉球文化をへだてる境であり，温帯と亜熱帯をへだてる境でもある。ただ，この本土方言圏に属することばに関しては特記しておかなければならないであろう。田畑千秋（2002）にも書いたが，特に諏訪之瀬島の 2000 年代初頭の言語事情について結論だけでも少しく書いておこう。

諏訪之瀬島はその中心部に標高七九九メートルの活火山御岳（おたけ）があり，その大噴火のために無人島になっていたところ，明治十六年奄美大島赤木名（現奄美市笠利町赤木名）出身の藤井富伝たちによって本格的な再開拓がはじまり，その後も奄美大島移住者がつづいた。そのため教職員の家族や昭和四十年代の移住者以外の島民の主な使用言語は笠利方言であった。調査は主に，基礎語彙の保存状態を調べるもので，インフォーマントは，A（奄美在住者・1923 年生　男性），B（奄美二世・諏訪之瀬島在住・1922 年生　女性），C（奄美三世・諏訪之瀬島在住・1953 年生　男性）であった。調査には沖縄言語研究センター（1983）を使用した。

その結果，奄美在住の赤木名一世（A）と諏訪之瀬島在住の赤木名二世（B）との語彙使用能力（会話，作文）は，ほとんど変わることがなかった。というより，もしかしたら古い言いまわしなどを諏訪之瀬島在住者が残しているのではないかという感触さえも得た。おそらく親世代の奄美語を使用しているため，奄美内部で起

こった言語イノベーションが届かないでいたのであろう。

C は，奄美諸島がアメリカ軍政下から日本に復帰した年に諏訪之瀬島で B の次男として生れている。C の幼少期から少年期にかけては，奄美大島名瀬市の同世代がトンフツゴという新しい方言を駆使して学校生活をおくっていた時代である。C の伝統的な奄美語は語彙上では母親に劣るが，アクセント，表現などにおいては，少年期を旧名瀬市内で過ごした同世代よりは，ずっと伝統的奄美語を保持していた。旧笠利町笠利の同世代と比べてもけっして伝統的奄美語の使用に関しては劣るとは思えなかった。

諏訪之瀬島には昭和 40 年代に新しい人生哲学を持った人たち（バンヤンと呼ばれた人たち）が移住してきて，島の言語生活にも影響を与えたという。古老によると，「集会などで，今までは方言で通じていたのに，それができなくなり共通語を使うようになった」という。彼らの移住により，新しい息吹が諏訪之瀬島に入り込み（諏訪瀬分校の校歌も彼らの一人の作詞による），今では島の重要な役もつとめている。奄美大島から連綿として受け継いできた八月踊りの継承も，彼らを入れて，未だ健在であった。そんな諏訪之瀬島の共通言語は，

一，旧来の島人の使うシマヤマトグチ（北大島のヤマトグチとほぼ同じトンフツゴ）
二，昭和四十年代の移住者の家族が使ういわゆる共通語
三，学校教職員が使う鹿児島共通語（特にアクセントに鹿児島方言を引きずっている）

の三者が，それぞれに使用され，お互いに不便はないという。

徳之島方言の現況について，シマ出身の岡村（2011）の「島口のいま」の項には，つぎのような指摘がなされている。

> まだ徳之島のあちこちで島口を聞くことが出来る。この島で島口はまだ生きている。だが，これはもう高齢化社会と同じであり，いま話している人達が地上から消えた時，この言葉も消えるのである。滅びゆく言語である。もう，この島で完全な島口伝承はないのが現状である。

つづいて，岡村家での島口の現状がかたられる。それによると，こども三人ともシマクチは理解言語であるがはなせなくなっていて，まごふたりも発音はできるし，かいたものはよめるが（これには，岡村（2007）の方言表記のいえもとであることがかかわっていそうである），「だが，話せなかった。」という。そして，長男家族の 3 年間のタイ国づとめによって，家族全員タイ語の日常会話はできるようになっていたのに，徳之島方言のつかえない原因を，岡村はつぎのように推測する。

> ……なぜ故郷の言葉（浅間口）は話せないのか。それは強大な共通語の存在が壁となっている。子供の生活は共通語の中にある。共通語は生活と結びついた言語であるが，島口は，子供の生活から切り離された言語である。だから伝承が困難だし，島口に伝わらず，やがて死滅するのである。

岡村（2011）にはさらに，いまの方言の「生活語としての基盤の弱さ」と「文字を持たず，文字の支えの無い音声言語の弱さ」という点がとりだされている。以前の方言は，生活語としての基盤の強さで標準語に対抗することができていたのだから，この基盤がくずれることは，死滅につながらざるをえない。また，文字をもたない言語は，孤立言語だったらそのまま，文字をもつ他言語によって存亡の危機にたたされるし，方言だったら文字にささえられた標準語に吸収されることになる。岡村（2011）は，この辺の事情を直視してまとめているといっていい。

なお，岡村（2011）にはかかれていないが，直話のなかで，体系としての方言はすでにほろびたということものべていた。方言状況のもっと深刻なシマをまわったこともあるものとしては，徳之島の方言はそれなりに機能しているという印象をもつ。岡村（2011）にも，先の引用に「この島で島口はまだ生きている。」とあることからも察せられる。しかし，同時に「この島で完全な島口伝承はない……」というのは，まさに方言の体系はすでにほろびていることをつたえようとしているのであろう。

ここまで簡単に奄美語の現況を書きつづってみたが，この世紀をまたいでの 20 年あまりは，しまびとのそれまでの方言コンプレックス，それと連動する調査恐怖症候とでもいえるものが，うすれ，きえていく一方，方言そのものも，方言らしさがうすれ，きえていくほうへ変質していくさなかにあるといえる。

## 参　照　文　献

岩倉市郎（1943）『喜界島昔話集』東京：三省堂.
岩倉市郎（1955［初版 1943］）『おきのえらぶ昔話』東京：古今書院.
沖縄言語研究センター（1983）『琉球列島の言語の研究―全集落調査表―』那覇：沖縄言語研究センター.
岡村隆博（2007）『奄美方言―カナ文字での書き方―』鹿児島：南方新社.
岡村隆博（2011）「滅びゆく島の言語―徳之島方言は絶滅危機言語―」日本島嶼学会 2011 年度徳之島大会レジュメ．9 月 10 日.
田畑英勝（1974）『奄美諸島の昔話』東京：日本放送出版協会.
田畑千秋（2000）「奄美大島における標準語普及―聞き書き・大正末から昭和前期の思いで―」『国文学　解釈と鑑賞』65(1): 43–53.
田畑千秋（2002）「トカラ列島の言語事情―諏訪之瀬島に残る奄美方言―」『国文学　解釈と鑑賞』67(1): 125–134.

執筆者連絡先：
田畑　千秋
〒 870-1192 大分県大分市旦野原 700 番地
大分大学教育福祉科学部
tabata@oita-u.ac.jp

［受領日　2012 年 5 月 24 日
最終原稿受理日　2012 年 8 月 4 日］

**Abstract**

## The Present Status of the Amami Dialects

Hirotake Matsumoto　Chiaki Tabata
*Beppu University*　*Oita University*

We two researchers—Matsumoto from the mainland of Japan and Tabata, a native of the Amami Islands and a native speaker of an Amami dialect—summarize the present status of the Amami dialects, which UNESCO included on its list of "endangered languages." This paper delineates the overall conditions of the Amami dialects based on our first-hand observations and experiences, divided into three periods: before 1970, the 1970s and 1980s, and from the 1990s to the present.

To summarize, the period up to the 1960s was the era when the "shimayumuta" traditional dialect was used on a daily basis; the 1970s and 1980s was the period when the "tonfutsugo" Amami standard dialect rapidly gained wide currency; and since the 1990s the "shimayumuta" has been on the road to extinction.

In addition, at the end of this paper, we report on the conditions of the language on Suwanose in the Tokara Islands, which was resettled beginning in the Meiji period by people from the hamlet of Akakina in the former village of Kasari on Amami-ōshima Island.